学びや タイムスリップ

③ 絵描き村（大正・昭和時代）

衣笠の芸術 子を見守る

京都市北区衣笠地域の小学校に伝わる「学校のたからもの」をご紹介します。小野竹喬や宇田荻邨といった著名な日本画家たちが描いた作品で、子どもたちが集まる教室や校長室に今でも飾られています。

衣笠の地に学校ができたのは1873（明治6）年。平野神社の境内に作られた小北山学校（後に平野小に改称）が始まりでした。その後、1918（大正7）年の市域拡張に際して衣笠村は京都市に編入され、平野校は衣笠小に改称します。そして、衣笠校から分かれ、1931（昭和6）年に大将軍小、1965（同40）年には金閣小が開校しました。

大正から昭和にかけて、市への編入を契機に住宅が増え始めると、市内に居た日本画家たちが次々と衣笠へ移り住むようになります。山水と向き合い、花や鳥を写生して作品を制作していた画家たちにとって、衣笠の自然はとても魅力的だったのです。

小野竹喬「風景図」（1923年ごろ、衣笠小蔵）

1人、2人とアトリエを構えると、画家の友人、同志、師弟の関係にあった者たちが後を追うように移住し、昭和10～20年代には70人以上の画家が衣笠で制作を行っていました。まさに衣笠は「絵描き村」だったのです。

そうした画家たちは地域の小学校に多くの作品を寄贈しています。1923（大正12）年、等持院近くに移住した小野竹喬は、自分の子が通う衣笠小に「風景図」を贈りました。穏やかな山水景の中、一人の人物が友人の家を訪ねていく場面を描く詩情豊かな作品です。

宇田荻邨「山桜図」（1931年ごろ、大将軍小蔵）

宇田荻邨は北野白梅町の南辺りに住んでおり、地域の大将軍小にはその作品「山桜図」が伝わっています。学校の創立記念に寄贈されたもので、衣笠の名所、平野神社の桜を思わせます。

衣笠の自然が育んだ芸術は、今も学校に通う子どもたちを見守っています。

（京都市学校歴史博物館学芸員　森光彦）

◇

今回紹介した作品は学校歴史博物館（下京区）の企画展「絵描き村と学校―衣笠に伝わる名画―」で12月16日まで展示しています。